

Title	E・J・ ホブズバウム著 革命の時代：一七八九年から一八四八年までのヨーロッパ
Sub Title	E. J. Hobsbawm; The age of revolution, Europe 1789-1848
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.9 (1964. 9) ,p.752(72)- 756(76)
JaLC DOI	10.14991/001.19640901-0072
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640901-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

E・J・ホッブスバウム著

『革命の時代——一七八九年から』

一八四八年までのヨーロッパ』

E. J. Hobsbawm: The Age of Revolution,
Europe 1789—1848, London 1962, pp. 356.

飯田 鼎

E・J・ホッブスバウムの名は、そのすぐれた業績によってイギリス労働運動史の研究者にはすでになじみ深いものとなっている⁽¹⁾。彼は現在、ロンドン大学のバークベック・カレッジのリーダーをつとめているが、たんに歴史家としてすぐれているばかりでなく、ジャズ音楽の評論家としても知られている⁽²⁾。

ところで本書は、一七八九年フランス革命の年から一八四八年のフランス二月革命までの六〇年を、『革命の時代』としてとらえ、この時代の政治、社会および経済などの分野におこったさまざまな事件を、主としてイギリス、フランスおよびドイツのエンゲルスのいわゆる「ヨーロッパの三大文明国」について考察し、さまざまな問題を提起している。概説書のような叙述があまりに多く、とくに独創性に富むとはいえないけれども、著者の社会史家としての豊富な力量、深い教養、広い視野、そして卓抜な問題提起にとくに興味を感じたので、紹介を試みるものである。つぎのような内容から成る。

はしがき

序論

第一部 発展

一、一七八〇年の世界

二、産業革命

三、フランス革命

四、戦争

五、平和

六、諸革命

七、民族主義

第二部 結果

八、土地

九、産業の世界に向って

十、出世は才能のまま

十一、労働貧民

十二、イデオロギー——宗教

十三、イデオロギー——世俗

十四、芸術

十五、科学

十六、結論——一八四八年に向って

目次をみれば明らかなように非常に広汎な問題を取りあつかっており、本書の全貌にふれる余裕はないが、まず問題点を指摘しよう。著者は、序論において、つぎのようにいう。「われわれの問題は、

新しい経済や社会のこれらの要素の存在ではなくして、その勝利を説明することである……。そしてこの突然の勝利が、それによってもっとも直接的に影響を及ぼした諸国の内部に、そしていまや新しい勢力、この時期の近代的な世界史の呼び名を引用するならば、『勝利しつつあるブルジョア』のまったく爆発的な衝撃のために開かれていた世界の内部にもたらした深甚な変化を辿ることでもある。(p. 3) 著者はここで、『二重の革命』(the dual revolution)という言葉によって、フランス革命とイギリス産業革命の同時的発生とこの両者の密接な関係、経済社会的変革と政治的革命的内在的関連の必然性、さらにイギリスおよびフランスという資本主義発展のテンポに相応した革命の二つの型を意味するものと思われるが、同時にそれは、一八四八年の革命への展望をあたえるものである。著者は、

「ランカシアにおける近代的な世界の最初の工場制度の建設と一七八九年のフランス革命とともに止まる歴史的な時期は、最初の鉄道網の建設と共産党宣言の発表とともに終る」とのべているが、序論の最後の文句としては、あまりにも現象的な説明であり、一七八九年から一八四八年までのこの時期が、近代の世界史にとっていかに画期的な重要性をもつかを説得させるにはきわめて不十分であるといわなければならない。ヨーロッパの歴史の視点から一七八九年のフランス革命と一八四八年の革命とを比較するならば、少くともつぎの二つの点で重要な差異があることを知っておく必要がある。(一)フランス革命の場合には、その政治上の革命が、イギリス産業革命とは直接且つ無媒介的には結びつかないこと、ところがこ

れに反して、一八四八年のフランス二月革命およびドイツ三月革命の場合には、政治的革命的な同時性、すでに産業革命が進展しつつあり、その両者は必然的に内在的関連をもっており、その意味ではその革命は、より進んだ段階でのブルジョア革命であったこと、(二)一七八九年の時点では、近代的なブルジョア革命であったこと、これに反し、一八四八年の革命においては、プロレタリアートが資本家階級の背後をおびやかす、社会主義的イデオロギーの影響を無視しえなかったこと、こうした分析的な視角なしには、たんなる事件の描写に終るのであり、著者にはそのような傾向が濃厚にみられる。

つぎに著者の産業革命およびフランス革命についての解決について問題点を指摘しよう。産業革命が、イギリスにおいて何故に最初におこったかという問題に言及し、十八世紀のイギリスを、その当時のフランスに比較すると、社会科学および自然科学のあらゆる分野で、フランスにおくれている。たとえばフランスではアダム・スミスに比肩しうる重農主義者、ケネーをはじめ、テュルゴー、デュポン・ド・ヌムールがいたし、ジャコカード織機のようなすぐれた機械が存在した。またドイツは、英国にはその類をみない鉱山専門学校(Bergakademie)、またフランスには、やはりユニークな理工科大学(Ecole Polytechnique)などがフランス革命の結果つくられたのに反し、イギリスではオックスフォード、ケンブリッジ両大学が、保守的な雰囲気の中で停滞していたのに反し、わずかに、カルヴィン派の影響の強いスコットランドが、ジェームズ・ウォット、

(James Watt) トーマス・テルフォード (Thomas Telford)、ジェームズ・ミル (James Mill) などのすぐれた人材を南部におくりますにとどまらず、教育の状態は全く劣悪であつて、国教派の教育制度から排除された非国教派によつて建設されたアカデミーを除けば、全く公立学校もしくはグラママー・スクールがあるだけという不活発な状態であつたし、初等教育の制度などもほとんど存在してゐなかつた。しかしそれにもかかわらず、産業革命は何故にイギリスに最初におこつたのであろうか。

著者は、これについて「知的な進歩 (intellectual refinement) は、産業革命をひきおこすのには、ほとんど必要ではなかつた」(p. 30) として、土地問題のなかに見出していることは、常識的な回答であるとしても注目すべきであらう。すなわち、「比較的少数の商業的精神をもった地主が、土地を独占し、それが土地を所有しない者もしくは小土地保有者によつて耕作されていたという事実、小農民はもはや、フランス、ドイツもしくはロシアの農民とは異なる、あくまでも資本家的な生産関係のなかにくみこまれた存在であり、農業それ自体が、「工業化の時代における三つの基本的な機能を果すべく準備されていた」ということを指摘する。つまり、(一)急速に増加する非農業人口に食糧を供給するために、生産および生産性を増大せしめること、(二)都市および産業のために大量のしかも増大する潜在的過剰人口 (a large and rising surplus of potential recruits) (三)経済の一層近代的分野において使用される資本蓄積のための機構を準備することである。

また産業革命の労働者階級にたいする影響としては、綿工業を中心とする労働者の貧困化、不満および悲惨、ヨーロッパ大陸における一八四八年の革命、英国におけるチャーティスト運動をあげなければならぬが、著者によれば資本家的視点からみた場合には、(一)景気循環、(二)利潤率低下の傾向、(三)有利な投資機会の不足があるというのであり、十八世紀末には比較的高かつた手織工の賃金が、十九世紀の二〇年代から三〇年代にかけて、いちじるしい下落を示している。(二七九五年、ボルトンの手織工の賃金は週三シリングであつたものが、一八一五年には一四シリング、一八二九年から三四年にかけては五シリング六ペンスと激減した)のは、産業革命の進展に伴つて必然化するこうした矛盾を克服しようとする彼らの努力の結果であるとのべているのも面白い。いまひとつ、労働力構成の問題であるが一八三四年から三七年までのイギリスの綿工業の場合、全労働者の約四分の一が成人男子であつたが、また半数以上が婦人・少女および十八歳未満の少年であり、そうした少年労働者の半数および少女労働者の三分の一が労働者 (coarse) に雇用されるという意味において二重雇用制がとられ、少年少女労働者は助手として下請労働者の地位にあつたことが指摘されている (p. 50)。

ところで著者は、フランス革命とこれにつづく戦争の時期において、革命がポーランドをはじめ、アイルランド、イタリアおよびベルギーなどのいわゆる被圧迫民族にあたえた影響を詳細に描写しているが、フランス革命は、植民地もしくは被圧迫民族の独立運動への気運をかきたてると同時に、近代国家は、ひとつの民族もしくは

共通の言語 (a single nation or linguistic group) によつて代表されるという条件をつくり出した。それと同時に、こうしたブルジョア革命の洗礼をうけず、長らく近代化への途を阻まれたトルコ帝国の後退、その広大な版図の崩壊によつて、植民地問題が、主として、イギリス、フランスおよびロシア間の勢力均衡、新たな植民地再編成の問題、いわゆる「東方問題」(Eastern question) を惹きおこした。著者はさらに、一八一五年以後、いわゆる反対派として、つぎの三つの流れをあげている。すなわち、(一)温和な自由主義派 (the moderate liberal) —— 社会的には、中産階級の上層部と自由主義的な貴族、(二)急進民主主義派 (the radical-democratic) —— 下層中産階級、新興産業資本家の一部、知識層および不満をもつジェントリー、社会主義者——労働貧民 (labouring poor) もしくは新興産業労働者階級とわけ、これらの諸勢力および諸階級が、結局、一八四八年の革命の主要な担い手として規定するわけであるが、きわめて面白いことに、語源的には、これらの諸勢力のすべての呼称、すなわち、「リベラル」(liberal) はフランススルースペイン系、「ラディカル」(radical) はイギリス、「ソシアリスト」(socialist) はアングロ・フレンチというように、語源的には、これらすべてはその時代のインターナショナルリズムを反映しているのは教訓的である。要するに以上の考察によつても明らかのように、一八四八年の革命は、基本的にはブルジョア革命であるが、その背後には労働者階級の運動——労働組合およびチャーティズムにみられるような革命的政運動、知識人および革命的先進的労働者を中心とする社会主義運動、および民族解

放運動がその姿をあらわし、複雑な陰影を投じていたことであり、一八五〇年以後はさらに、産業資本主義発展のなかで、それらの問題が次第に大きな矛盾として拡大再生産されてゆくのである。

本書は、非常に歴大な研究であり、すでに指摘したようなさまざまな問題が提起されており、また理解を容易にするために必要な充的な絵画や写真が豊富にかかげられており、まことに興味深い、実証的な叙述に専心するあまり、理論的な方法論が全く不鮮明であることが目立っている。たとえば、一七八九年から一八四八年までの六〇年間のヨーロッパ、とくにイギリス、フランスおよびドイツの三国を中心に、いろいろの角度から政治、社会および経済的事件の特徴を個々バラバラに紹介している感があるのであるが、それぞれの国の特殊な条件のなかで展開されるさまざまな運動が、どのような法則性と関連性のもとに把握されるべきかが、まったく明らかではない。筆者は、資本主義発展の不均等性の追求という問題意識をもつて考察するのでなければ、この時期の革命とそれに伴うさまざまな問題は正しく整理されないのではないかと思う。イギリス、フランスおよびドイツの三国における資本主義発展の段階的な差異とその特殊な諸条件に規定された諸矛盾の現象面での相違点、しかもその中でそれらの諸矛盾が相互に影響し合い、一八四八年の革命発生の具体的条件を形成するという法則的な把握が不充分であるように思う。その上に、労働組合運動、社会主義運動および民族解放運動が一八四八年の革命において、どのように相互に規定しあっているか、全体としての一八四八年革命の歴史的意義が明らかに

されるであらう。

- (1) 著者には、本書のほかにつきのような業績がある。Labour's Turning Point 1880—1900, 1948. 著者(Primitive Rebels, 1959. その他、すぐれた論文が多数あることはよく知られている。
- (2) 著者はまた、フランシス・ニュートン (Francis Newton) というペン・ネームで The Jazz Scene, 1961 (Penguin) というジャズ音楽にかんする著書がある。
- (3) この点について、筆者には、つぎのような大塚久雄教授の言葉が印象的である。「いま近代ヨーロッパにおける資本主義の成立というわれわれの当面の視点から眺めるとき、そうした世界史上の巨きな個性的な流れがおよそ次のような形をとることは周知のことといてよいと思う。すなわち、古代オリエントで専制諸国家という姿をとってあらわれた貢納制社会→古典古代の地中海周辺におけるギリシア、ローマなどの奴隷制社会→中世ヨーロッパとくにガリアを中心として展開された封建社会→近代西ヨーロッパとりわけイングランド、ネーデルランドを起点として生誕し拡張するにいたった資本主義社会、という世界史的発展の段階的進行である(『西洋経済史講座』I 岩波書店、緒言一四頁)。またこれに関連して、スコットランド歴史学派の英国資本主義との関係も注目されるべきであって、この点については、水田洋「スコットランド歴史学派」(『経済学史講座』I 有斐閣、一九六四年所収) が面白い。」(London, 1962, ¥ 3,000)

一九六四・六・一七

次号目次

論 説

- 社会事業の概念……………青沼吉松
——小島栄次教授の業績を顧みて——
第一インターナショナルと民族問題(一)……………飯田 鼎
——マルクス主義とポーランドの解放——
国内物価と輸出価格の変動……………川島 楊子

資 料

- 企業成長と市場構造……………原 豊

書 評

- ケール『ベルタン——重農学派の大臣』……………渡辺 國廣
ロイ・ハロッド編
『発展途上にある世界における国際貿易理論』………深海 博明

新刊紹介

新刊紹介

宇野 弘蔵 著

『経 済 原 論』

今度、岩波全書の一冊として刊行された本書は、内容の基本線においては旧書(一九五三年岩波書店から上下二冊として刊行)と変わるところがない。旧書は、宇野弘蔵氏の戦前からの『資本論』研究にもとづき、『資本論』を展開の基軸として、全く独自の経済学の理論体系を提示されたものであった。しかも、その後今日にいたるまでに、宇野氏の独自の方法論である、原理論・段階論・現状分析という三段階論のうちの原理論に属する部分として、宇野経済学全体系のうちにも位置づけられるに至った。本書はかかる宇野氏自らの発展の新たな段階で旧書を改められたものである。

宇野氏の『資本論』研究は、戦後非常な注目を浴び、また多くの論者が批判を展開し

新刊紹介

た。それは、方法論、価値論(商品論)、恐慌論、商業利潤論、利子論、地代論等にわたり、あらゆる理論問題を覆っている。かかる広範な批判の展開にもかかわらず、宇野氏自身は、何ら原理論での主張を変更する必要がなかったといわれるのは何故であらうか。それは、従来の批判が、単にマルクスの展開と宇野氏の違いにのみ集中し、宇野氏の体系そのものに集中しなかったこと、および、宇野理論を克服する体系が建設されなかったことによるであらう。このような意味において、われわれは宇野氏の問題提起に積極的に取り組んでゆかなくてはならないであらう。

さて、本書は、旧書に比べて、注が新しくなり、その内容も、近年の論議を反映している。とくに著しい特徴と考えられるのは、さきのべた例の三段階論の役割が原理論の随所において旧書に比しより明確に論ぜられていることである。とくに段階論と原理論の区別と関連性について一層あきらかにされている。宇野氏への批判、とくにその内在的批判の中心が、原理論と段階論との関連という処にあっただけに、それに対する宇野氏の反応

は興味深いものがある。またいま一つ重要なことは、科学とイデオロギーを峻別するという点、したがって原理論を科学として論理的に体系づけるといふ点が本書の前提として強調されていることを看過しえない。

本書は以上のごとく、旧書よりもより原理論的なものとなつていくといえよう。同時にそのことは、本書が宇野経済学の原論であつて、マルクス経済学の原論ではないということもあきらかにするであらう。われわれはこの『経済学』を、われわれの直面する現代の課題を追求するうちにおいてのみ正しく評価しうることにある。また、それ以外に克服し創造的発展の道はない。(岩波全書・一九六四年五月刊・二二七頁・三五〇円)

——飯田 裕康——

小島 清 著

『低開発国の貿易』

——貿易開発会議への提案——

一九六〇年代は南北問題の時代であるといわれており、それを象徴する動きとして、国